王陵の地域史研究

～飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅲ～

2009

例　言

1、この調査は「飛鳥地域の地域史研究」の一環として行った測量調査である。調査地は以下の通りである。

・　都塚古墳　　奈良県高市郡明日香村大字阪田小字都塚938番地他

・　牽牛子塚古墳　　奈良県高市郡明日香村大字越小字御前塚725番地他

2、測量調査に際しては、古墳の土地所有者の各位にご理解あるご協力をいただき、順調に進行、完了したことに深謝の意を表したい。また調査・資料収集等に際してご尽力を賜った関係各位に感謝の意を表します。(五十音順・敬称略)

相原嘉之、猪熊兼勝、上田俊和、上田裕敏、上田行洋、奥田　尚、河上邦彦、窪田正昭、窪田隆温、米田隆夫、辰巳月美、西　基之、橋本芳長、長谷川　透、山本源治、米田文孝

3、遺跡分布図は、国土地理院発行の二万五千分の一「畝傍」と奈良国立文化財研究所発行の「地の窪」「坂田」(1：1000)、明日香村都市計画図（1：2500）を使用した。

4、石材鑑定には奥田　尚氏（奈良県立橿原考古学研究所共同研究員）に玉稿を賜った。

5、本書の執筆は西光慎治、辰巳俊輔、奥田　尚があたり、文責は各文末に示した。

6、関係書類・図面等は西光慎治が保管している。

7、本書の編集は西光慎治が担当した。

目　次

例言　目次 …… (24)

第1章　調査に至る経緯と目的 …… 西光慎治 (25)

第2章　飛鳥地域の測量調査 …… (26)

第1節　地理的・歴史的環境 …… 西光慎治 (26)

第2節　都塚古墳測量調査報告 …… 辰巳俊輔・西光慎治 (30)

1、はじめに …… (30)

2、測量調査報告 …… (35)

3、表採遺物 …… (35)

第3節　牽牛子塚古墳測量調査報告 …… 辰巳俊輔・西光慎治 (36)

1、はじめに …… (36)

2、測量調査報告 …… (41)

第4節　真弓テラノマエ古墳踏査報告 …… 西光慎治 (42)

1、はじめに …… (42)

2、踏査報告 …… (42)

3、表採遺物 …… (42)

第5節　野口王墓古墳の凝灰岩切石 …… 西光慎治 (45)

1、はじめに …… (45)

2、実測調査報告 …… (47)

3、石材分析 …… 奥田　尚 (47)

第3章　総括 …… 西光慎治 (47)

挿図目次

第１図：明日香村周辺地質図
第２図：飛鳥地域周辺遺跡分布図（1：25000）
第３図：都塚古墳位置図（1：1000）
第４図：都塚古墳周辺地籍図
第５図：都塚古墳位置図（明治26年）
第６図：大和國古墳墓取調書（明治26年）
第７図：都塚古墳（『高市郡志料』）
第８図：都塚石棺（『高市郡志料』）
第９図：都塚古墳墳丘測量図（1：200）
第10図：都塚古墳表採遺物（1：2）
第11図：牽牛子塚古墳位置図（1：1000）
第12図：牽牛子塚古墳周辺地籍図
第13図：牽牛子塚古墳位置図（明治26年）
第14図：大和國古墳墓取調書（明治26年）
第15図：牽牛子塚（『高市郡志料』）
第16図：牽牛子塚古墳墳丘測量図（1：100）
第17図：真弓テラノマエ古墳位置図（1：1000）
第18図：真弓テラノマエ古墳周辺地籍図
第19図：真弓テラノマエ古墳表採土器（1：2）
第20図：真弓テラノマエ古墳表採石材（1：4）
第21図：野口王墓古墳　石材

第１章　調査に至る経緯と目的

飛鳥地域には多くの後・終末期古墳が分布していることは周知のことである。しかし未だ資料化されていないものも少なくない。こういった中、1982（昭和57）年以降、奈良県橿原考古学研究所や関西大学文学部考古学研究室等によってキトラ古墳をはじめ牽牛子塚古墳や岩屋山古墳、塚本古墳などの測量調査が実施されている。こういった測量調査は基礎資料の資料化として地域史研究にとって重要な役割を担っていることはいうまでもない。

今回の調査は筆者が飛鳥と周辺地域の地域史像の解明に向けて取り組んでいる「飛鳥地域の地域史研究」の一環として企画し、土地所有者のご厚意・ご協力のもと測量調査・踏査を実施したものである。

調査は通常勤務に支障のないことを期したため、休日や年末・年始を利用した断続的な調査となった。調査期間は平成20年９月～平成21年１月にかけてのべ20日間行った。

（西光慎治）

【調査体制】

調査体制は以下の通りである。

	都塚古墳	牽牛子塚古墳
担当者	西光慎治	西光慎治
調査員	辰巳俊輔（関西大学文学部考古学研究室）	辰巳俊輔　（関西大学文学部考古学研究室）

【見学会の開催】

参加者を中心に測量調査の深化と比較検討を行うため、見学会を実施した。見学した古墳は以下の通りである。

赤坂天王山古墳、岩屋山古墳、打上古墳、カヅマヤマ古墳、カンジョ古墳、艸墓古墳、権現堂古墳、小谷古墳、菖蒲池古墳、新宮山古墳、谷首古墳、谷脇古墳、束明神古墳、塚本古墳、花山西塚古墳、花山東塚古墳、真弓鑵子塚古墳、マルコ山古墳、文殊院西古墳、文殊院東古墳

第２章　飛鳥地域の測量調査

第１節　地理的・歴史的環境

【地理的環境】

明日香村は奈良盆地の南端に位置しており、背後には龍門山地が連なっている。龍門山地は奈良盆地と吉野山地を二分する位置にあり、中央構造線にそって吉野川が西流している。吉野川は下流域の和歌山県に入ると紀ノ川と称されている。龍門山地は奈良県のほぼ中央を東西に伸びており、奈良盆地と吉野山地とを繋ぐ幹線道は現在では芦原峠（芦原トンネル）となっているが古代では下ツ道から続く、巨勢路（紀路）や宮滝へと続く芋ヶ峠がありこれらの幹線道は村内を貫いており交通の要衝であったことが窺える。龍門山地は龍門岳（904ｍ）を主峰にして、北に熊ヶ岳（904ｍ）、経ヶ塚山（889ｍ）、音羽山（801ｍ）が連なり、東には多武峰の御破裂山（619ｍ）を、西に高取山（583ｍ）を配している。明日香村は御破裂山、高取山から派生した樹枝状に伸びた低位丘陵に抱かれた地域に位置している。

明日香村内の主要河川は南東から村内を縦断するように一級河川の飛鳥川が、西には高取川があり、それぞれ北流している。飛鳥川は多武峰と高取山から連なる芋ヶ峠、竜在峠付近に源を発している。途中、冬野川や唯称寺川と合流し、甘樫丘の東方で流れを北西に屈曲させ北流を続けていく。一方、高取川には桧前盆地を流れる桧前川が注ぎ込んでいる。

桧前盆地は標高100ｍの等高線に囲まれた１㎞四方の小氾濫原の支谷に形成されており、西側には幹線道の下ツ道が接している。高取川の西方にある貝吹山から伸びる尾根筋の裾部には高市郡と葛城郡との郡界となる曽我川が北流しており、大字寺崎付近で越峠付近から伸びる前川が曽我川に流れ込んでいる。

（西光慎治）

第１図　明日香村周辺地質図（武久1979）

【歴史的環境】

〈縄文時代〉

明日香村では飛鳥川や高取川流域を中心として縄文時代から人類の生活の営みを知ることができる。高取川流域では縄文時代草創期の有茎尖頭器が出土した桧前脇田遺跡をはじめとして、飛鳥川流域では飛鳥池遺跡で草創期の有茎尖頭器と木の葉形尖頭器が出土している。中期～晩期にかけては稲淵ムガンダ遺跡・坂田寺下層遺跡・島庄遺跡・飛鳥京下層遺跡・大官大寺下層遺跡等が存在し、集石遺構や竪穴式住居、土器棺などが検出されている。

〈弥生時代〉

弥生時代になると飛鳥川流域では飛鳥京下層遺跡（岡遺跡）（前期～後期）・山田道遺跡（中期）があり、島庄遺跡では中期の多角形プランを有した竪穴住居が検出されている。冬野川の上流域ではＶ様式系甕が出土したとされており、周辺に集落が存在していた可能性がある。高取川流域では御園アリイ遺跡（中期）で土坑などが検出されている。

〈古墳時代〉

古墳時代ではまとまった遺跡は確認されていないが坂田寺下層遺跡や島庄遺跡、飛鳥京下層遺跡、水落遺跡、大官大寺下層遺跡等で６世紀前半～後半にかけての竪穴住居等が数棟検出されている。また東橘遺跡や川原寺下層遺跡、甘樫丘東麓遺跡、古宮遺跡、上ノ井手遺跡、山田道下層遺跡等でも竪穴住居や韓式系土器、滑石製玉類や土坑等が検出されている。高取川流域では御園アリイ遺跡や桧前タバタ遺跡で竪穴式住居や古式土師器が検出されている。飛鳥川流域では右岸の段丘上を中心に縄文時代から人々が生活を営んできたが、６世紀末に飛鳥真神原に飛鳥寺が建立されて以降、寺院や宮殿が立ち並ぶようになる。飛鳥京周辺でも酒船石遺跡や雷丘、甘樫丘等で形象埴輪や普通円筒が出土しており、宮殿造営に伴って削平、消滅した古墳が多く存在していたことがわかる。更に飛鳥川の支流、冬野川流域には横穴式石室を主体とした約200基を超える細川谷古墳群が展開している。群内には緑泥石片岩の箱式石棺を内蔵した堂ノ前塚古墳や戒成組田古墳、穹窿状横穴式石室を有しミニチュア炊飯具等が出土した上５号墳、石材の一部に切石を用いた打上古墳など特徴のある古墳が多く分布している。また冬野川下流域には一辺約60ｍの方墳の石舞台古墳が存在し、対岸には都塚古墳や塚本古墳など家形石棺を有した６世紀後半から７世紀初頭にかけての古墳が築かれている。その他、寺川の支流、中の川の上流部には八釣・東山古墳群が展開しており、多くの馬具やガラス玉等が出土している。また曽我川の支流、前川の上流部では６世紀中頃に造営された真弓鑵子塚古墳がある。真弓鑵子塚古墳は玄室の北側に奥室を有し、玄室床面積は石舞台古墳をしのぶ規模であり、石室内からはミニチュア炊飯具をはじめ銀象嵌刀装具、玉類、金銅製馬具、そして獣面を模った獣面飾金具などが出土している。前川の右岸ではミニチュア炊飯具等が出土した与楽古墳群など貝吹山（標高210ｍ）の南側斜面には数百基の古墳が展開し、左岸にあるスズミ１号墳からもミニチュア炊飯具が出土するなど、前川を中心とした周辺の古墳群は東漢氏の奥津城と考えられている。また高取川流域では方格規矩鏡や四獣形鏡等が出土した向山１号墳やミニチュア炊飯具や釵子が出土した坂ノ山古墳群、銀製釧などが出土した稲村山古墳などが点在している。隣接してある観覚寺遺跡や清水谷遺跡、薩摩遺跡からは大壁建物やオンドル遺構、方形池が検出されるなど檜隈地域周辺には多くの渡来系氏族が蕃居していたことが窺える。

1、都塚古墳　2、牽牛子塚古墳　3、真弓テラノマエ古墳　4、野口王墓古墳　5、小谷古墳　6、沼山古墳　7、益田岩船　8、与楽古墳群
9、真弓鑵子塚古墳　10、岩屋山古墳　11、スズミ１号墳　12、スズミ２号墳　13、カヅマヤマ古墳　14、マルコ山古墳　15、束明神古墳　16、佐田１号墳
17、佐田２号墳　18、出口山古墳　19、森カシタニ遺跡　20、森カシタニ塚古墳　21、向山１号墳　22、薩摩遺跡　23、松山呑谷古墳　24、清水谷遺跡
25、ホラント遺跡　26、稲村山古墳　27、観覚寺遺跡　28、坂ノ山古墳群　29、佐田遺跡群　30、桧前上山遺跡　31、キトラ古墳　32、桧前門田遺跡
33、栗原寺跡　34、檜隈寺跡　35、御園チシヤイ遺跡・御園アリイ遺跡　36、塚穴古墳　37、高松塚古墳　38、火振山古墳　39、中尾山古墳
40、平田キタガワ遺跡　41、梅山古墳　42、カナヅカ古墳　43、鬼ノ俎・雪隠古墳　44、定林寺跡　45、西橘遺跡　46、亀石　47、川原下ノ茶屋遺跡
48、菖蒲池古墳　49、五条野宮ヶ原1・2号墳　50、五条野向イ古墳　51、五条野城脇古墳　52、五条野内垣内古墳　53、植山古墳　54、五条野丸山古墳
55、軽寺跡　56、石川精舎　57、田中廃寺　58、和田廃寺　59、大官大寺跡　60、雷丘北方遺跡　61、豊浦寺跡　62、雷丘　63、雷丘東方遺跡
64、カサヤ塚古墳　65、庚申塚古墳　66、山田寺跡　67、上の井出遺跡　68、奥山久米寺跡　69、石神遺跡　70、飛鳥水落遺跡　71、竹田遺跡
72、八釣東山古墳群　73、金鳥塚古墳　74、東山マキド遺跡　75、小原宮ノウシロ遺跡　76、飛鳥東垣内遺跡　77、飛鳥寺跡　78、飛鳥池遺跡
79、酒船石遺跡　80、甘樫丘東麓遺跡　81、川原寺裏山遺跡　82、川原寺跡　83、飛鳥京跡苑池遺構　84、飛鳥京跡　85、橘寺跡　86、東橘遺跡
87、島庄遺跡　88、石舞台古墳　89、打上古墳　90、戒成組田古墳　91、馬場頭古墳群　92、坂田寺跡　93、飛鳥稲淵宮殿跡　94、塚本古墳
95、朝風廃寺　96、稲淵ムカンダ遺跡

第２図　飛鳥地域周辺遺跡分布図（１：25000）

〈飛鳥時代〉

7世紀に入ると高取川左岸（真弓丘陵）から右岸（桧前盆地）にかけて多くの終末期古墳が築かれるようになる。真弓丘陵では精美な横穴式石室を有した岩屋山古墳や凝灰岩の巨石を刳り貫いた牽牛子塚古墳があり、石室内からは大量の夾紵棺片とともに七宝亀甲形座金具や玉類が出土している。更に南方には六角形を呈したマルコ山古墳や凝灰岩の切石を積み上げた束明神古墳、骨蔵器を内蔵したとされる出口山古墳などが点在している。また結晶片岩の磚積石室で棺台を有したカヅマヤマ古墳などが点在している。桧前盆地になると梅山古墳からカナヅカ古墳、鬼の俎・雪隠古墳、野口王墓が東西に並んで築かれており、南方には八角形墳で火葬墓の中尾山古墳や極彩色の壁画で有名な高松塚古墳が存在している。更に高松塚古墳から1.5㎞南には四神図や天文図、十二支像が確認されたキトラ古墳がある。飛鳥盆地では蘇我氏の氏寺の飛鳥寺をはじめ、豊浦寺や山田寺、奥山久米寺、坂田寺、定林寺などの多くの古代寺院が築かれる。国家寺院としては百済大寺（吉備池廃寺）が造営され、その法灯は高市大寺、大官大寺、奈良大安寺へと繋がれていく。天皇家の寺院としては斉明天皇の菩提を弔うために川原宮の跡地に川原寺が造営される。また宮殿も乙巳の変の舞台となった飛鳥板蓋宮や斉明天皇の後飛鳥岡本宮、天武天皇の飛鳥浄御原宮や苑池などが造営される。これらの宮殿に近接して酒船石遺跡や飛鳥池遺跡がある。酒船石遺跡では酒船石を中心に丘陵を藤原層群豊田累層の凝灰岩質細粒砂岩を使用した石垣が約700ｍにわたって巡っており、また丘陵の北側裾部からは亀形石造物を中心とした導水施設と石敷き広場が検出されるなど二槻宮との関連が注目されている。また石上山石を運んだ狂心渠と考えられる幅約10ｍの運河跡が飛鳥東垣内遺跡で検出されている。この運河の延長は約１㎞にわたって続いており、上流部には飛鳥池遺跡が存在する。飛鳥池遺跡は７～８世紀にかけての官営工房で炉跡や石組み溝、掘立柱建物の遺構の他、金属・ガラス玉・鋳型・大量の木簡、また鋳造貨幣では和同開珎より遡るとされる「富本銭」が出土している。この他、飛鳥東方の丘陵地には小原シウロ遺跡や東山マキド遺跡、竹田遺跡があり、７世紀代の掘立柱建物群が検出されている。また橘寺西方にある西橘遺跡では７世紀後半～末にかけての庇付掘立柱建物や大量の木簡が出土している。宮殿域の中心部から離れた桧前盆地では東漢氏の氏寺とされる檜隈寺や呉原寺等、渡来系氏族の寺院が建立されるようになる。

〈奈良時代以降〉

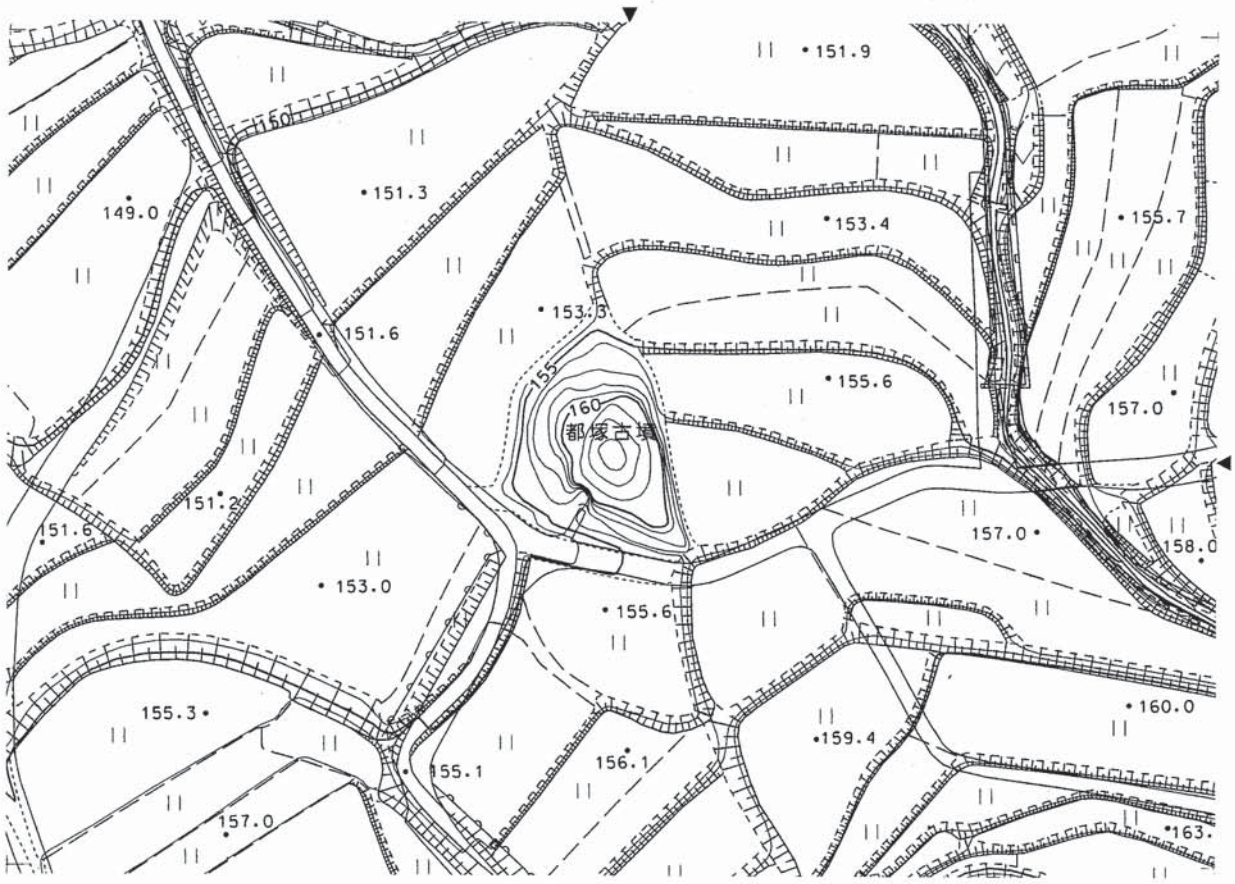
西暦694年、政治の舞台は飛鳥京から藤原京へ、更に藤原京から平城京に移るようになると飛鳥地域では顕著な遺構はあまり認められなくなる。一方、雷丘東方遺跡では井戸枠の年輪年代から淳仁朝の「小治田宮」が奈良から平安時代にかけて存続していたことも明らかとなっている。中世以降になると南北朝期に越智氏が越智城を構え、飛鳥周辺にも貝吹山城や佐田城が築かれるようになる。また越智氏は高取山に逃げ城的な存在の高取城を築き、その後本多氏、植村氏によって改修を重ねながら高取藩の居城として幕末まで存続していく。高取城の石垣の一部には古墳の石材を転用しており、この時期飛鳥地域の後・終末期古墳が破壊されていたことが推測できる。飛鳥盆地には砦的性格をもつ奥山城や飛鳥城、雷城や岡城、そして野口城や貝吹城、観覚寺城が築かれるようになる。近世になると西国七番札所である岡寺（龍蓋寺）の門前町が賑わいをみせ、本居宣長も岡の薬屋で一夜を過ごしており、今日もなお古い町並みは往時を偲ばせてくれる。

（西光慎治）

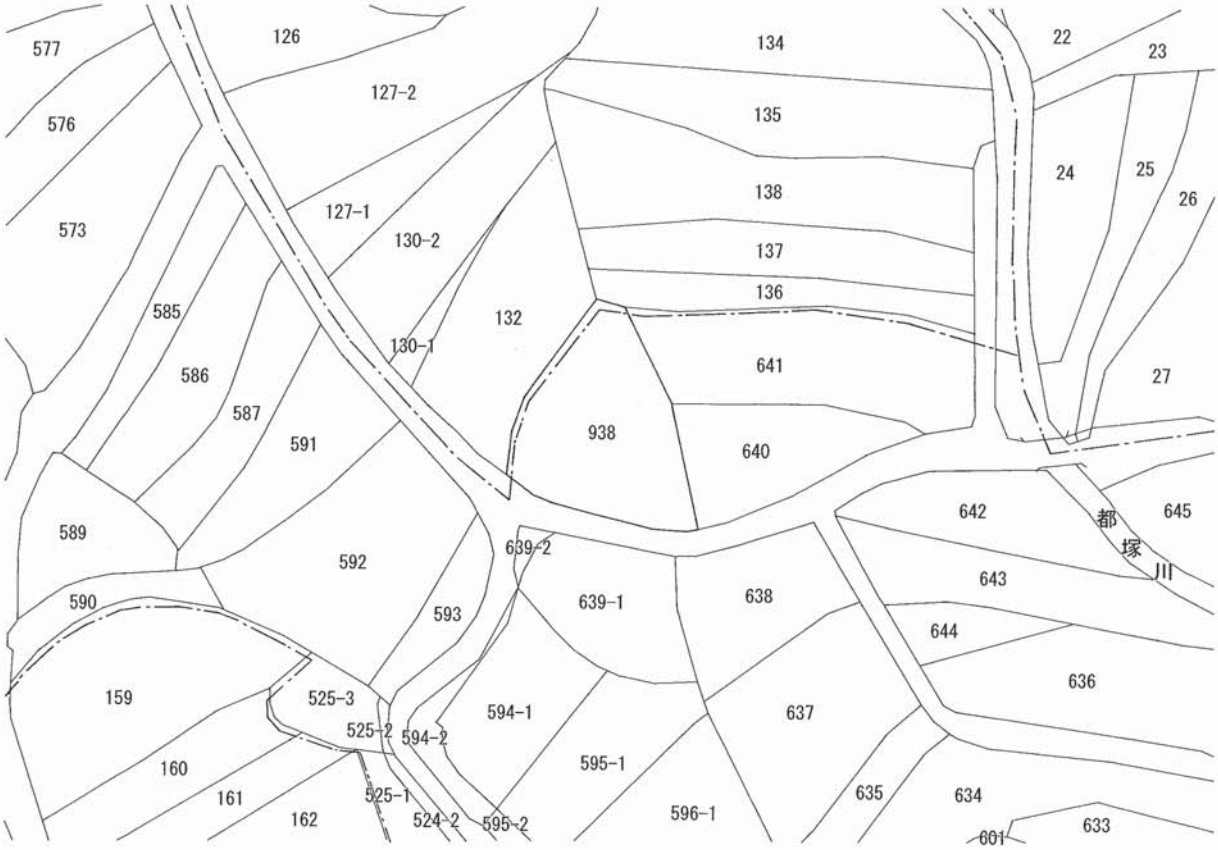
第２節　都塚古墳測量調査報告

１、はじめに

都塚古墳は奈良県高市郡明日香村大字阪田小字都塚938番地に所在する後期古墳である。都塚古墳には正月元旦に金鳥が時を告げるという金鳥伝説があり、別名金鳥塚（きんちょうづか）とも呼ばれている。都塚古墳については1772（明和９）年に刊行された本居宣長の『**菅笠日記**』に「嶋の庄といふ所には。推古天皇の御陵とて。つかのうへに岩屋あり。内は畳八ひらばかりしかるゝ廣さに侍る。又岡より十町ばかり。これも同じ方に。坂田村と申すには。用明天皇ををさめ奉りし所。みやこ塚といひて。これもそのつかのうへに。大きなる岩の角。すこしあらはれて見え侍る也となんかたりける。」とあり、江戸時代には被葬者については用明天皇の伝承があったことが伺える。1908（明治41）年に刊行された大西源一の「**大和國高市郡坂田の古墳**」には「俗にミヤコ塚、又はキンチョウ塚とも呼ばれ、口碑に塚の中に金の鶏ありて毎年正月元旦に鳴くと傳へたり、古墳の位置は田圃の間にて其の形状は圓形にして石槨の口は南に面して開きたり、（中略）石槨は羨道を有し其の高さ四尺（但埋没したるによる）巾五尺七寸、長さ八尺あり、又玄室の廣袤は長一丈六尺八寸、巾八尺七寸、高約一丈なり、石質は花崗岩にて不規則の石材を使用せり。而して石槨内に一個の石棺あり。石棺は大石を掘り抜きて作れるものにて、其の蓋は四方葺きなること左右に各一個、前後に各一個の突起を有する従来大和、播磨等より發見せられたる石棺中往々見る處なり、土人の語る處によれば嘗て此の蓋を開きたりしに内部に朱の付着しありたりしを認めたる外何者もなかりしと云ふ。（中略）石棺の大さは下の如し。身　高三尺、長さ七尺四寸、幅四尺八寸、厚一尺　蓋　高二尺三寸、石棺の石質は俗に練石と称し、佛徒が誇張して三國の土を練りて作りたりと称する彼の大和稲淵の竹野王碑、久米寺の層塔等と同種類のものなり。」とあり、石室内には15～55㎝程度土砂が堆積しており、石棺内には朱が塗布されていたことがわかる。1913（大正２）年に刊行された『**奈良縣史蹟勝地調査會報告書　第一回**』には「一名金鳥塚ト称シ、田畑ノ間ニ介在セル小丘ナリ羨道ハ南端ニアリテ甚短カク石槨全部花崗岩石ノ大塊ヲ以テ築造サル、石棺ハ凝灰岩ニシテ蓋ハ極メテ精巧ナル六個ノ縄掛突起ヲ有ス。」と記されている。1915（大正４）年刊行の『**高市郡志料**』には「都塚　都塚は高市村大字坂田字都塚に在り。坂田の民家の北方二丁許の處にありて、俗に都塚又金鳥塚とも称す。古来口碑に塚内金鶏ありて毎年正月元旦に出て鳴くと傳へたり。田圃間に在る圓形古墳にして石槨の入り口は南に開きたり。玄室は長一丈六尺八寸高さ約一丈あり、羨道の高四尺幅五尺七寸長八尺あり石質花崗岩質片麻岩にして不規則なる石材を使用せり、而して石槨内に一箇の掘抜石棺を蔵す。石棺は身高三尺長七尺四寸幅四尺八寸厚一尺あり。蓋の高二尺三寸あり石質は俗に練石と称する流紋岩質の凝灰岩なり。」とある。1923（大正13）年に刊行された『**高市郡古墳誌**』には「高市小學校の西側を通って、大字祝戸に至り、左へ道をとって大字阪田へ行く途中、左側に小高い原野がある。これが即ち都塚である。田圃の間にある孤立してある芝地であって、その周囲に杉の生垣を繞らして有るから誰でも目に付く。俗に都塚又は金鳥塚とも言ふのである。高さ二間、長径十五間、短径四間、面積約一段十二歩ある。圓形古墳で石槨の口は南に開けて居る。羨道の長さ九尺五寸入口の部分は、幅三尺八寸、高さ二尺五寸、玄室に接する部分で高さ四尺幅五尺七寸ある。玄室は高さ一丈五尺五寸、幅九尺、高さは天井の中央の最も高い所で。一丈五寸ある。玄室の中では火燈なくとも内部の状態は略知ることが出来る。石質は花崗岩片麻岩で不規則なる石材を使用してある。而して石槨内に一箇の掘抜石棺が蔵してある。石棺は高さ三尺、長さ七尺四寸、厚さ一尺ある。蓋の高さ二



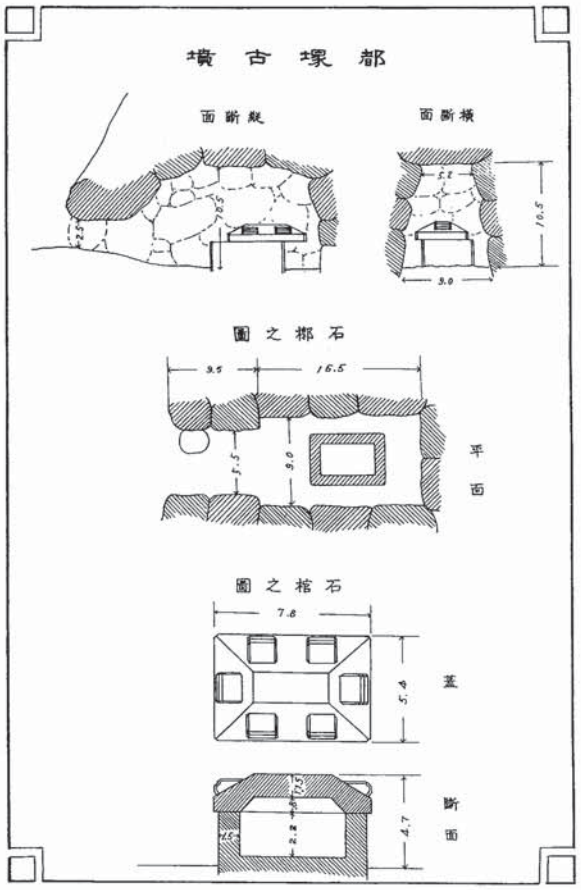
第3図　都塚古墳位置図（1：1000）



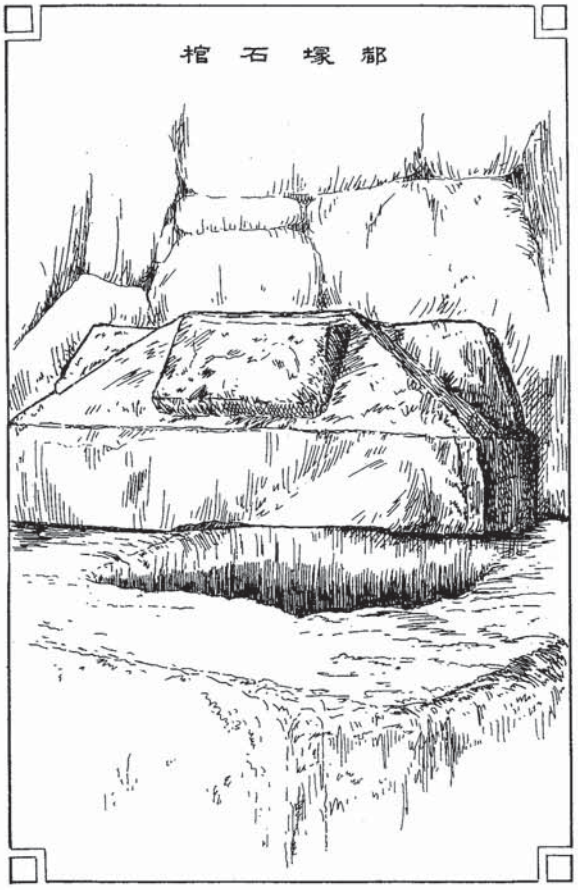
第4図　都塚古墳周辺地籍図

第5図　都塚古墳位置図（明治26年）

第6図　大和國古墳墓取調書（明治26年）



第7図　都塚古墳（『高市郡志料』）



第8図　都塚石棺（『高市郡志料』）

第９図　都塚古墳　墳丘測量図（１：200）

尺三寸、石質は俗に練石と称する流紋岩質の凝灰岩である。古来口碑に塚内に金鶏あって、毎年正月元旦に出て鳴くと傳へて居る。」と記されている。1925（大正14）年に刊行された『**奈良縣史蹟名勝天然記念物調査會報告（縣内御陵墓・同傳説地及ビ古墳墓表）第八回**』の高市郡の中に「都塚（金鳥塚）　周圍田　町村高市村　大字阪田　字都　九三八番地　地目芝地　面積五畝〇二歩　廣袤東西壹貳間　南北壹五間　所有者阪田共用　備考（報告一）石槨ハ花崗岩ヨリナリ又縄掛突起ノアル凝灰岩ヨリナレル石棺アリ」と記されている。1967（昭和42）年には関西大学文学部考古学研究室による発掘調査が行われ、墳丘は一辺約28～30ｍの方墳か円墳で、南に開口する両袖式横穴式石室内からは凝灰岩製の家形石棺と追葬時の木棺、そして土師器・須恵器・鉄製品（刀子・鉄鏃・鉄釘・小札）等が出土している。　（西光慎治）

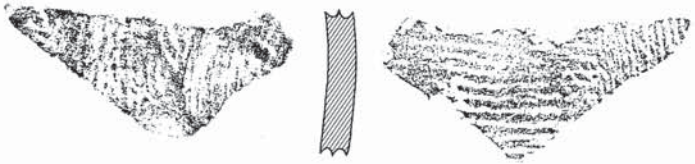
2、測量調査報告

都塚古墳は竜門山系から伸びる尾根の先端部に位置している。石室は南西方向に開口する両袖式横穴式石室で、羨道部は天井石が失われている。墳丘については現状では台形状を呈しており、墳丘東側と北西側では削平等による改変が認められる。しかし、墳丘南側と北側では等高線が直線を呈するなど旧状をとどめている箇所も確認できる。墳丘高については墳丘が南から北へと下がる傾斜地に立地しているため裾部の傾斜変換線は西側が153.750ｍ、東側が157.250ｍと東側の方が高くなっており、比高差は3.5ｍを測る。更に西側では傾斜変換線の153.750ｍから墳頂の159.864ｍまで約６ｍ、東側では標高157.250ｍから墳頂まで約２ｍとなっている。墳丘南側の標高158.000ｍ～159.000ｍと北側の156.750～157.750ｍ付近には幅約２ｍの平坦面が認められ、テラスの存在も考えられる。外部施設については墳丘断面に拳大の角礫が多く認められるものの葺石かどうかは不明である。埴輪は認められない。墳形については、墳丘の北と南西側にコーナー部分が確認できることや墳丘北西と南西部分で等高線が直線を成していること、また墳丘から北西約10ｍの所で墳丘西側裾部と平行するように畦畔が存在していることなどを総合すると墳丘は一辺約28～30ｍ、高さ２～６ｍ程度の方墳に復元することができる。　（辰巳俊輔）

3、表採遺物

墳丘の測量調査中、須恵器片１点を表採した。破片は須恵器甕の体部である。内面は同心円文の叩きが施され、外面は平行叩きがみられる。

（西光慎治）



第10図　都塚古墳　表採遺物（１：２）

【引用・参考文献】

大西源一1908「大和國高市郡坂田の古墳」『考古界』第７篇第５號　考古學會

奈良縣1913『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第一回

奈良縣1914『奈良縣史蹟名勝天然記念物調査會報告（縣内御陵墓・同傳説地及ビ古墳墓表）』第八回

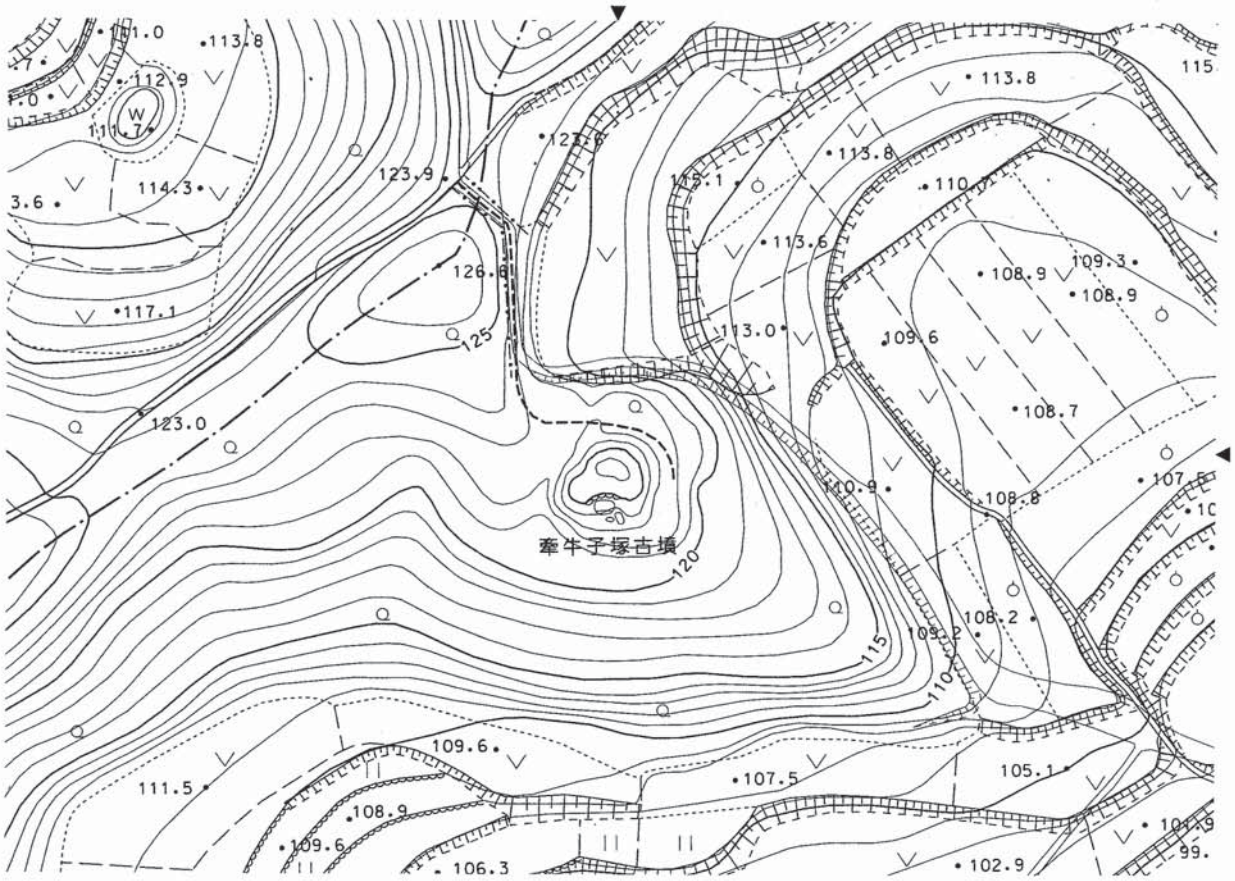
高市郡役所1915『高市郡史料』

関西大学文学部考古学研究室1968「奈良県明日香村阪田都塚古墳発掘調査報告」『関西大学考古学研究年報二』

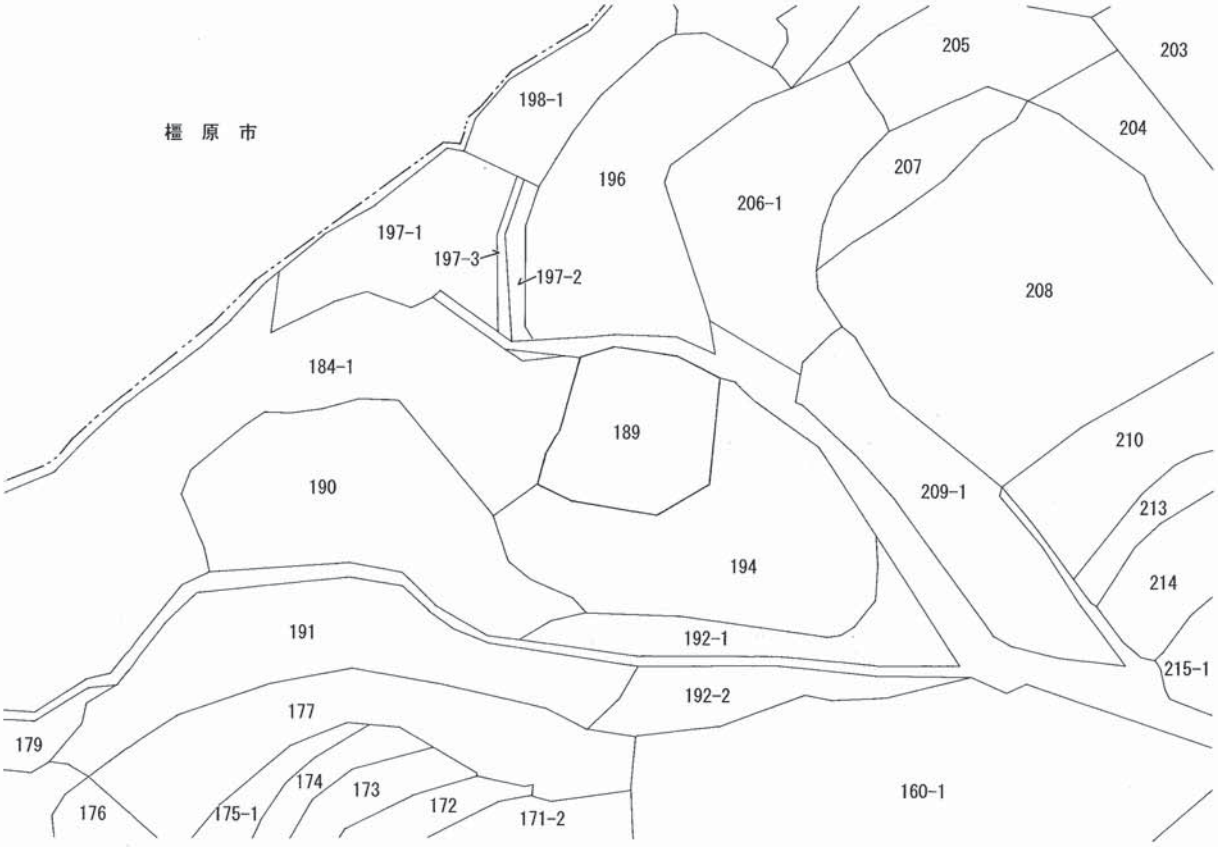
第３節　牽牛子塚古墳測量調査報告

１、はじめに

牽牛子塚古墳は奈良県高市郡明日香村大字越小字塚御前189他に所在する終末期古墳である。牽牛子塚古墳については1893（明治26）年、野淵龍潜の『**大和國古墳墓取調書**』に「高市郡坂合村大字越ニ在リ　字塚御前ト唱フ二段ノ築造ニシテ南面石室ノ口アリ　即チ羨道ノ露出セシモノニテ巨石門口ニ在リテ天井トナレリ其質全ク練石ナリ　其口狭隘ナルヲ以テ入ルヲ得ス点火シテ稍々之ヲ窺フニ判然タラス唯四壁白色ノ模糊タルヲ見ル　村人ノ言ニ拠レハ往年ハ門口大ニシテ出入リスルヲ得タリ内構ハ方形ニシテ四面ノ石皆白色羨道ノ石ト異ナルナシ云々ト是ヲ以テ考フレバ総体練石ヲ以テ築造シタルガ如シ又タ其廣狭ヲ村人ニ問ヘハ三四畳敷位ナラント答ルノミニテ其地ハ明瞭ナルヲ得ス後面即チ北方ノ処ニモ練石露出セリ是玄室ノ側面ニヤアランヤ如此鄭重ナル構造ナルモ古書傳説等ノ考査ニ供スル資料ナキヲ以テ考定スルヲ得ス且其字ノ御前ト云ヘルヨリ推考スレバ或ハ貴婦人ノ御墓所ニヤアランヤ」と記されている。1915（大正４）年刊行の『**高市郡志料**』には「牽牛子塚　牽牛子塚は坂合村大字越の人家を距る西北約四丁字御前塚（地籍圖には塚御前とありて名寄帳には御前塚とあり）塚に在り。此の古墳は低き丘陵の上緩傾斜をなせる畑地の内に於て僅に取残されたる高二間周圍十數間の圓塚にして、白檮樹數種其の上に在りて之を護するに似たり。此の古墳に就きて特筆すへきは石槨の制尋常ならさるにあり。嘗て發掘せられたりしか大正三年五月上旬更に入口の蔽土を除去せしを以て精密なる測定をなすことを得たり。即ち羨道は幅四尺九寸八歩高三尺五寸ありて幅二尺なる角石材を用ひたり。内部は中壁を以て二房に分たれ通して幅九尺五寸奥行六尺九寸五分奥行三尺九寸高又三尺九寸あり。而して巨石の面に羨道口を塞くへく高一尺の凸部を刻し之を以て蓋をなせしもの丶如し。尚其の外に若干の装置をなせしと思はる丶石材數箇今外部に散亂せり。又蓋石は嘗て強開せられし儘の位置にあるもの丶如し。又内部の泥土中に少數の遺物を残留せしを拾収せり。就て見るに棺の破片と遺骨及装飾品の残片數種あり、而して棺の原料は厚き麻布の如き織物を幾重にも疊貼し其の上に漆を塗りたり、棺の形は破片によりて考ふるに甕形をなせしもの丶如し。遺物は現今阪合村役場に蔵せり。此の古墳に関しては里人の傳説多し。或は草壁皇太子真弓岡陵に擬するものあり。或は川島皇子の御墓と称し或は浅香王の塚なりと云へり。然れとも徴證なし。唯其の構造の制によりて推考すれは中壁によりて左右均斎に区画せるは一人の屍體を収めたるには非すして、夫婦若しくは同胞なとを葬りしものなるへく、又室内面積の狭きは蓋し火葬者の遺骨なとを収めたる棺を葬れるならんや。規模は小なれとも構造の精巧なるは古墳時代の末期に属すへきを信するに足るなり。」と記されている。1920（大正９）年刊行の『奈良縣史蹟勝地調査會報告書　第七回』に所収されている佐藤小吉の「**牽牛子塚**」には「墳丘上白檮樹の叢生するありて、其形状遠望して、一見其古墳たるを察知するに足る。大正元年の交、余が始て調査に従事せし頃は、羨道部に僅に數寸の入口あるのみにて、脚部を先にして、漸く玄室内に匍匐し降るを得る位なりき」とあり、更に報告文には「余（佐藤）は、大正二年八月の本會総會に、牽牛子塚に関する調査てふ、一文を提出して、此の古墳の他に類例見ざる、極めて珍貴にして、且精巧無比なるものなることを報告せり。（途中略）余は又此古墳の保存法を建議せしに、幸に當局者の容る丶所となり、保存に必要なる補助金を下附せられ、縣より漸次郡村に移牒して、其保存法を講ずること丶なれり、該塚所在地の阪合村役場が、大正三年五月、羨道部を浚ひ木柵を建設せんと企てし際、羨道部の蓋石・人骨・漆棺・装飾品等の遺品を發見するに至れり。余は本年八月開會の総會後、高橋委員と調査を遂げ、更に阪谷



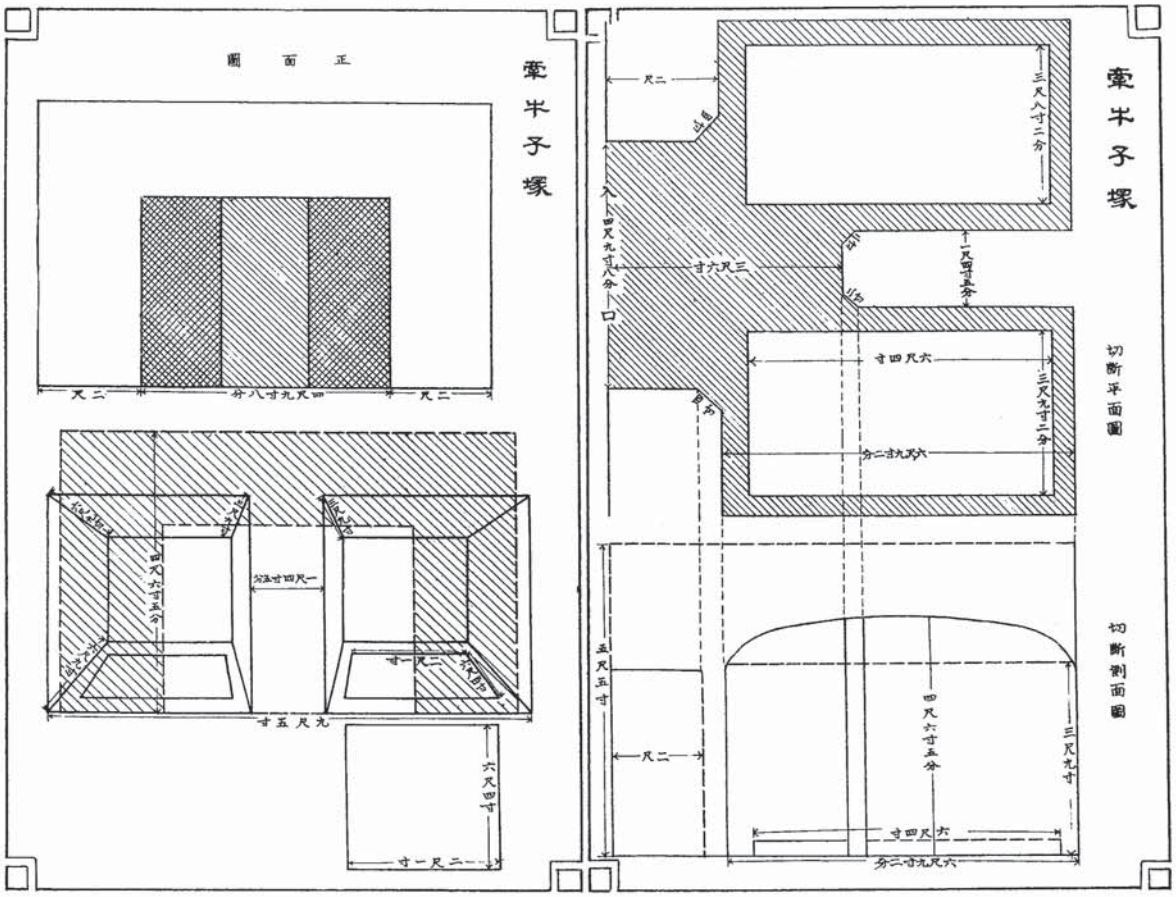
第11図　牽牛子塚古墳位置図（1：1000）



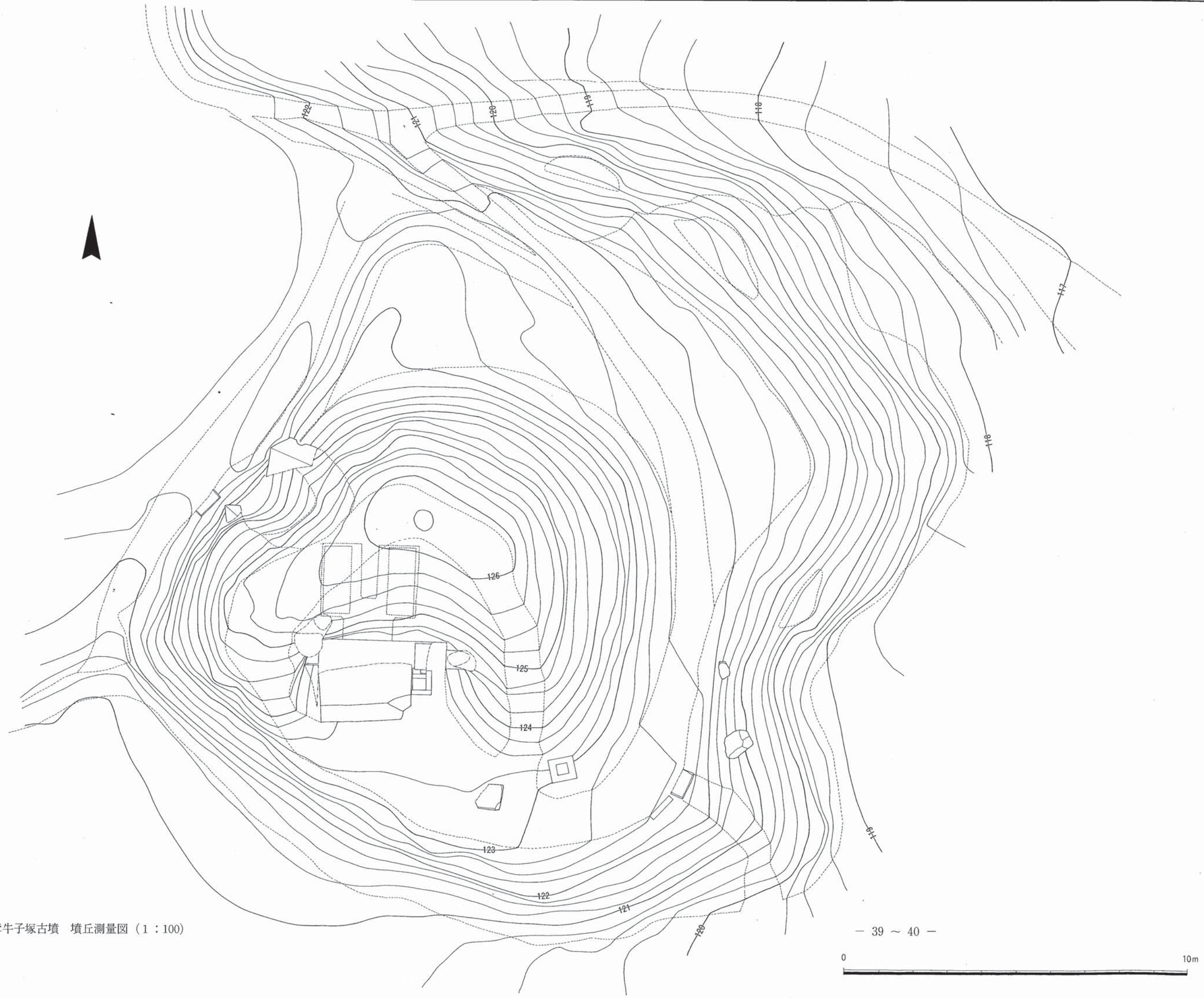
第12図　牽牛子塚古墳周辺地籍図

第13図　牽牛子塚古墳位置図（明治26年）

第14図　大和國古墳墓取調書（明治26年）



第15図　牽牛子塚（『高市郡志料』）



第16図　牽牛子塚古墳　墳丘測量図（1：100）

委員、稲森書記を煩はして各種の圖面の製作を請ひ、更めて、牽牛子塚に就きての調査報告を起草することゝせり。」と記されている。これによると大正元年に佐藤氏らによる調査が行われ、大正３年には阪合村役場による保存工事が実施されていたことがわかる。この工事の際、公文書によると「（イ）原料布製ト認ムル如キ壷ノ口ト覚シキ破片或ハ胴ノ破片人骨等発見セリ（数個）、（ロ）装飾二用ヒタルモノノ如キ金質細片及冠リ用ノ垂房ノ瑠璃色ノ玉二個、（ハ）金質様ノ一寸二分六角形半片壱個」とあり、亀甲形七宝金具や玉類、人骨等が出土していたことがわかる。1923（大正12）年３月７日には国史跡に指定されている。1976（昭和51）年には由良学術文化助成基金による測量調査が行われている。この調査で多角形墳の可能性が指摘されており、多角形墳（八角形墳）として仮定した場合、一辺約７ｍ、対角距離（円墳であれば直径）約18.5ｍ、高さ約４ｍの規模と推定されている。1977（昭和52）年には環境整備事業の一環として発掘調査が実施されており、この調査では石槨前面を中心に行われ、道板痕跡をはじめ、外扉石の支点石や中世の盗掘坑等が検出されている。調査後には園路や歩行柵などの環境整備が行われ、同年３月に竣工している。

今回の調査は墳丘の現状を確認することを目的として平成20年９月に実施したものである。

（西光慎治）

２、測量調査報告

牽牛子塚古墳は貝吹山（標高210.3ｍ）から南北に伸びる小支脈の尾根上にあり、そこから更に舌状に伸びた三条の尾根の中央に位置している。墳丘は上下からなる二段築成である。墳丘の北側から東側にかけて比較的明瞭に残存し、北側の標高122.500ｍ～123.250ｍから東側の標高121.500ｍ～122.500ｍにかけてはテラス面も確認することができる。しかし西側は大きく削平されているためテラス面については不明である。墳頂から石槨開口部付近にかけて盗掘により大きく改変・削平され、石槨外扉石は45°南に傾いている。高さについては北東側の墳丘裾の傾斜変換線の標高118.500ｍから墳頂の標高126.250ｍまで7.75ｍとなり、墳丘上段の裾部の標高122.250ｍから墳頂の標高126.250ｍまでは4ｍとなる。上段の北側と南側の傾斜変換線は標高122.750ｍであり、比高差はほぼ一定である。それに対して、下段は北側が標高約119.000ｍ、南側が標高121.250ｍと約2.25ｍの比高差を測る。下段墳丘にある解説板より東側では一部崩れた箇所が12ｍにわたって存在している。墳形については墳丘上段の北側と東側には標高約123.000ｍ～125.000ｍを軸に屈曲したラインが三箇所で確認できる。これらのラインは墳丘の東半分だけでも四ヶ所確認することができる。これらをもとに墳丘を復元してみると牽牛子塚古墳は多角形（八角形）を呈していた可能性が考えられる。仮に多角形として復元すると下段は対角長約25ｍ、高さ約５ｍ、上段は対角長約15ｍ、高さ約４ｍとなる。（辰巳俊輔）

【引用・参考文献】

野淵龍潜1893『大和國古墳墓取調書』

高市郡役所1915『高市郡志料』

奈良縣1920『奈良縣史蹟調査會報告書　第七回』

明日香村教育委員会1977『史跡牽牛子塚古墳－環境整備事業に伴う事前調査報告－』

奈良県立橿原考古学研究所編1982『飛鳥・磐余地域の後、終末期古墳と寺院跡』奈良県文化財調査報告書　第39集

第４節　真弓テラノマエ古墳踏査報告

１、はじめに

真弓テラノマエ古墳[1]は奈良県高市郡明日香村大字真弓小字テラノマエ1411他に所在する終末期古墳である。古墳が所在する地域は古く「真弓崗」と呼ばれ、周辺には横口式石槨のマルコ山古墳をはじめ、磚積石室墳のカヅマヤマ古墳、束明神古墳など多くの後・終末期古墳が点在している。また、古墳の南方には延喜式内社である櫛玉命神社が鎮座している。真弓テラノマエ古墳はカヅマヤマ古墳やマルコ山古墳と同じ東西に伸びる低位丘陵の南側斜面に立地している。地元伝承では、明治時代に石取りのため古墳が破壊されたという。その後、墳丘のあった場所は開墾され、畑地として利用さていたが、現在では竹が密集した荒れた状態となっている。踏査は1997（平成９）年から2008（平成20）年にかけて休日を利用して行った。（西光慎治）

２、踏査報告

真弓テラノマエ古墳は東西に伸びる低位丘陵の南側斜面を利用して築かれている。墳丘の背後には東西約70ｍ、高さ約12ｍにわたって終末期古墳の特徴である古墳造成時の切断面が明瞭に確認できる。切断面には数箇所の滑落崖があり、また中央付近では幅約７ｍ、長さ９ｍにわたって地滑りにより崩落している。この崩落は昭和41年の航空写真には写っていないことからそれ以降のものと考えられる。墳丘については現在失われており、平坦面となっている。また周辺部には漆喰の付着した結晶片岩[2]が散乱していることから西方に隣接するカヅマヤマ古墳同様、結晶片岩を使用した磚積石室墳であった可能性が考えられる。　（西光慎治）

３、表採遺物（第19・20図）

【土器】

土器は墳丘推定地の平坦面で表採したものである。破片は須恵器甕の体部で内面は同心円文の叩き目が、外面には格子状の叩き目が施されている。

【石材】

石材は墳丘推定地の南西約30ｍの位置で表採したものである。石材は泥質片岩で長辺50㎝、短辺16㎝、厚さ８㎝を測る。短辺側には漆喰が一部残存している。

（西光慎治）

【註】

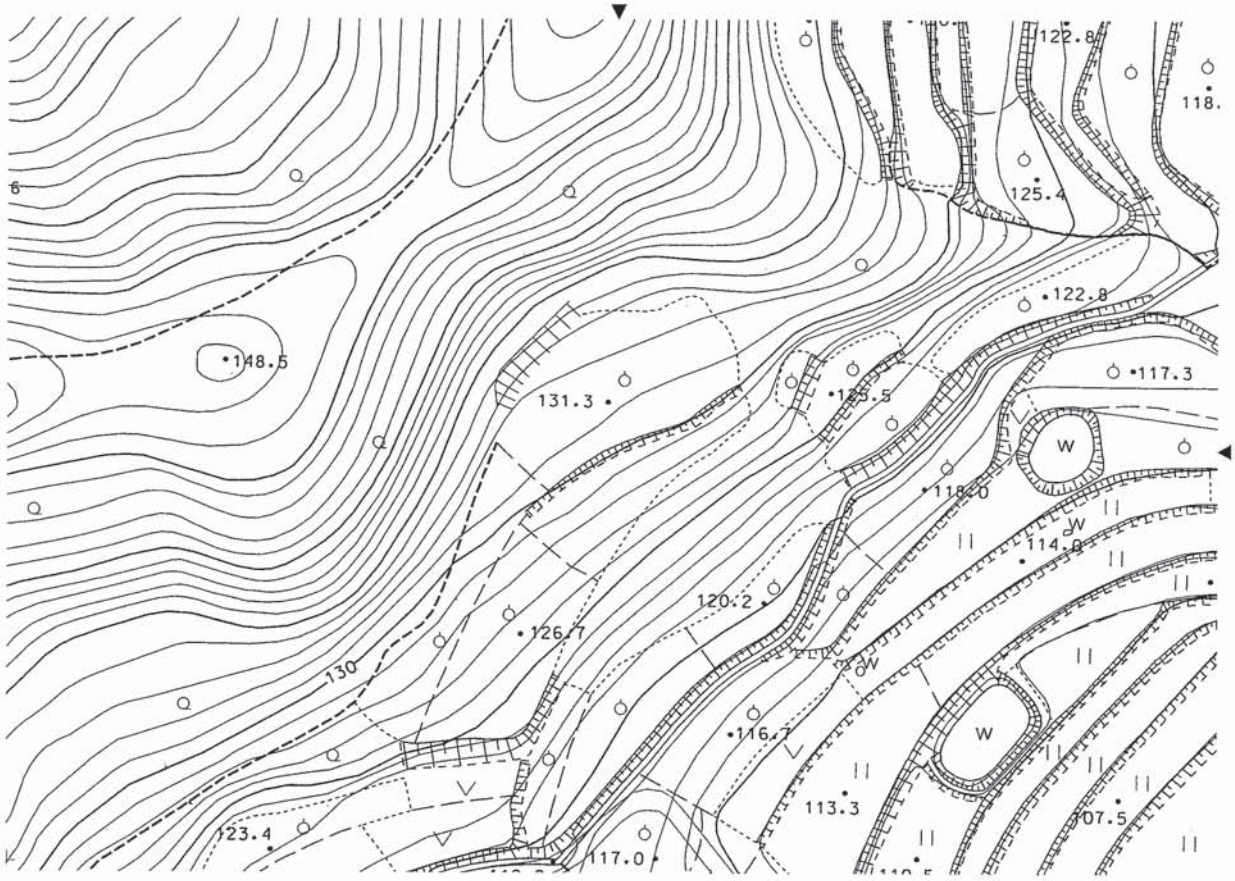
1）筆者はかつて真弓テラノマエ古墳についてミヅツ古墳と仮称して報告した経緯があるが、その後の地籍調査の結果、古墳の所在する場所が小字ミヅツではなく、小字テラノマエであることが判明したため名称については今後、真弓テラノマエ古墳として仮称することとする。

2）結晶片岩の他に漆喰の付着した平瓦片も表採している。

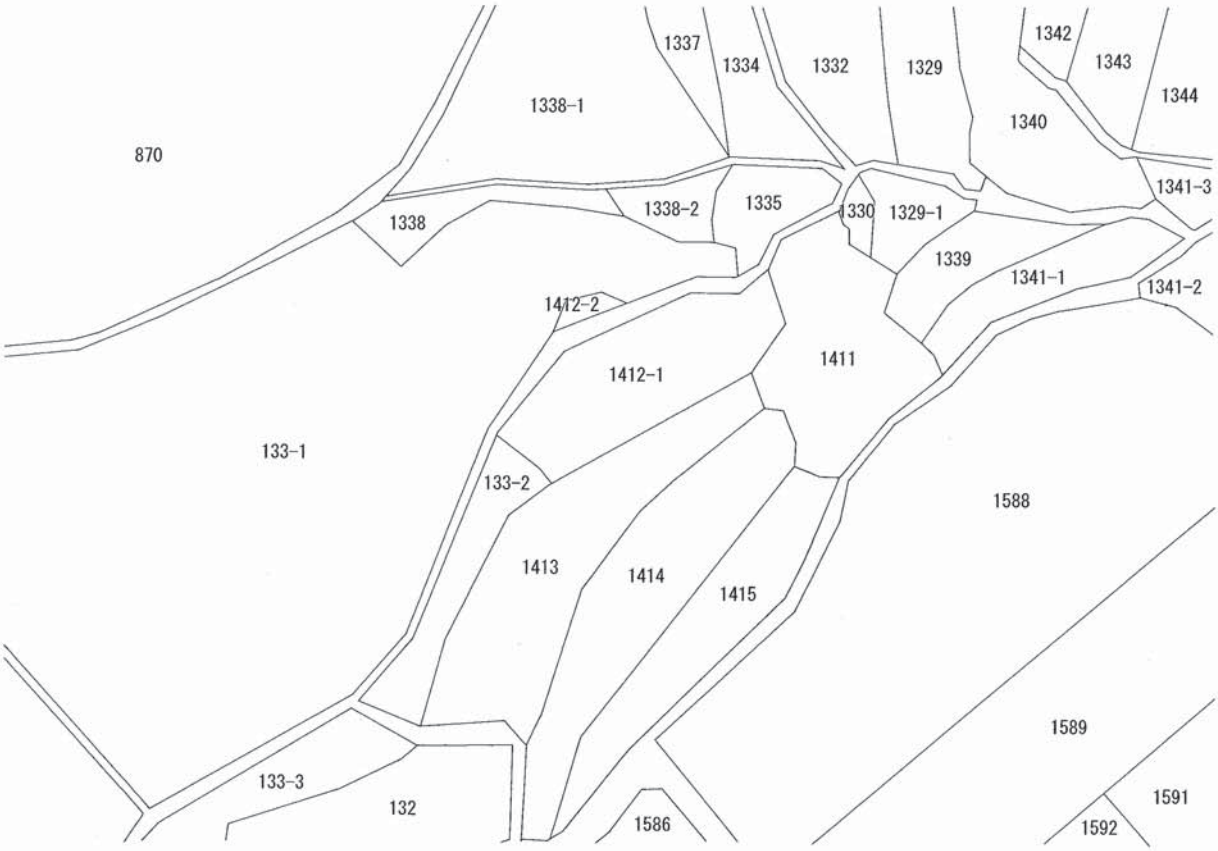
【引用・参考文献】

飛鳥資料館編1981『飛鳥時代の古墳』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館図録

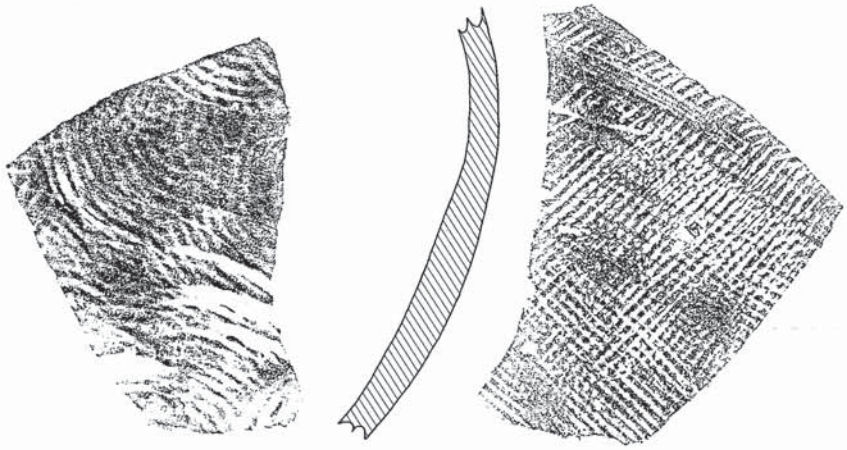
西光慎治2004「結晶片岩使用古墳研究序説」『明日香村文化財調査研究紀要』第４号　明日香村教育委員会



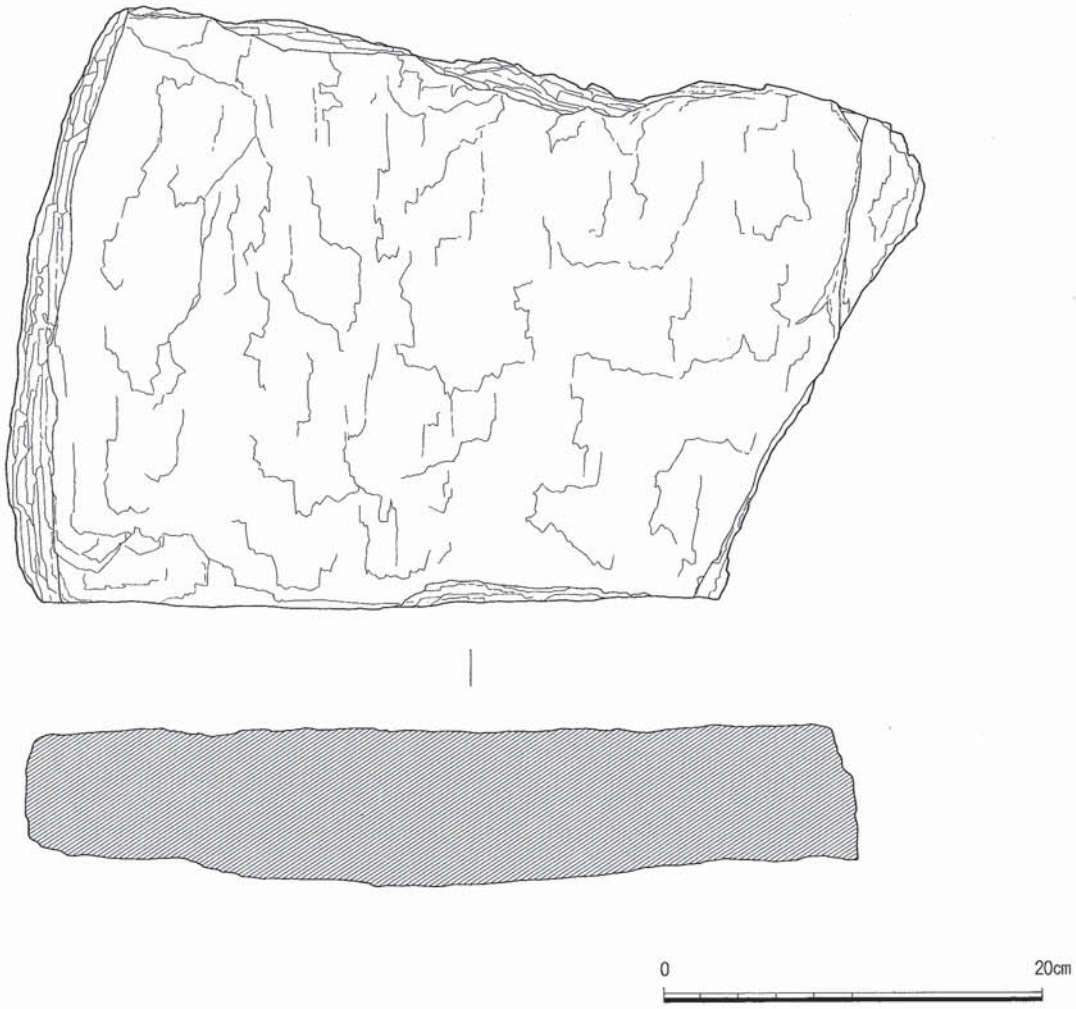
第17図　真弓テラノマエ古墳位置図（1：1000）



第18図　真弓テラノマエ古墳周辺地籍図



第19図　真弓テラノマエ古墳　表採土器（1：2）



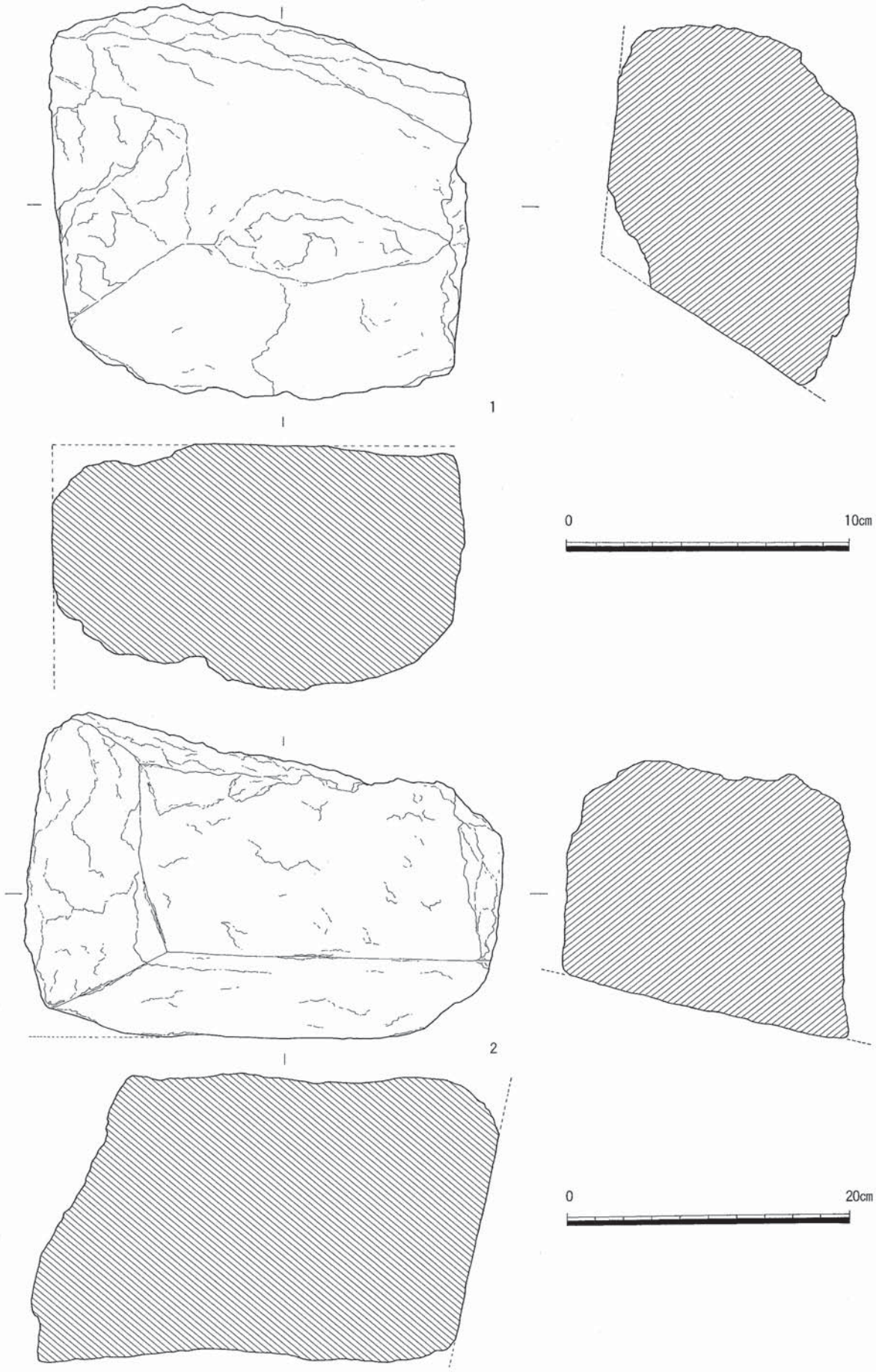
第20図　真弓テラノマエ古墳　表採石材（1：4）

第５節　野口王墓古墳の凝灰岩切石

１、はじめに

野口王墓古墳は奈良県高市郡明日香村大字野口小字尾墓に所在する終末期古墳である。現在は宮内庁よって天武・持統天皇の檜隈大内陵に治定されている。野口王墓古墳については江戸時代に刊行された『**大和名所圖會**』に石室が開口していた様子が描かれており、また『大和國帝陵図』にも石室の入口と墳頂部から西側にかけての大きな盗掘坑が記されるなど早くから荒廃していた様子が窺える。本居宣長も1772（明和９）年３月10日に野口王墓古墳を訪れており、その時の様子を「みなみむきに。横もたても二尺あまりなる口のあるより。のぞきみて見ればいはやのようにて。内はせばく。下は土にうづもれて。わづかにはひいるばかり也。うへには。たてよこ一丈あまりのひらなる大石を。物のふたのやうにおほひたり。そのうしろにつゝきたる所。一丈四五尺がほど。やゝたひらにて。中のくぼみたるは。近き世に。高取の城きつくとて。大石どもほりとりしあと也といへり。」と荒廃した様子を『**菅笠日記**』に記している。この野口王墓古墳については幕末の陵墓考定で文武天皇の檜隈安古崗上陵とされ、天武・持統天皇陵については橿原市五条野町の五条野（見瀬）丸山古墳が考定されていた。しかし、明治13（1880）年６月13日に京都栂尾高山寺で嘉禎元（1235）年に野口王墓古墳が開掘された時の観察記録である『**阿不幾乃山陵記**』が発見されるに至り、明治14（1881）年２月15日に天武・持統陵は五条野丸山古墳から野口王墓古墳に、文武陵は野口王墓古墳から現陵の栗原塚穴古墳へと改定が行われた。治定解除後の五条野丸山古墳については陵墓参考地として宮内省によって管理されている。野口王墓古墳の埋葬施設については『阿不幾乃山陵記』によると石室は内陣と外陣からなる横穴式石室であったと考えられる。石室規模は全長8.1ｍで、玄室長は4.6ｍ、幅2.9ｍ、高さ2.4ｍ、羨道長3.5ｍ、幅2.4ｍ、高さ2.2ｍと記されている。玄室と羨道の境には獅子顔に把手が付いた両開きの金銅製の扉が設けられていたことがわかる。また、石室に使用されている石材については「皆瑪瑙也」と記されており、白大理石であった可能性が指摘されている。『**大養國山陵記録**』には「石ノ窟屋　各別見事也」とあることから自然石ではなく、切石を用いた精緻な石室であったことが想定される。また石室内部については「内陣三方上下　皆瑪瑙歟、朱塗也」とあることから壁面に朱が施されていたことがわかる。また棺については「御棺張物也（中略）朱塗」とあることから漆と絹（麻）などで作られた朱塗りの漆棺であったと考えられる。棺の大きさについては長さ約2.1ｍ、幅75㎝、高さ75㎝であったとされ、格狭間のある金銅製の棺台の上に安置されていたことがわかる。棺内には人骨や紅色の衣服、石帯、枕、玉類があったことがわかる。更に漆棺の横には金銅製の桶があり、中には人骨と玉類が収められていたとあり、この桶が骨蔵器かは不明であるが仮に火葬骨を収めた骨蔵器であったとすると慶雲元(704)年に飛鳥岡で荼毘にふされた持統天皇の骨蔵器と考えることができる。更に持統天皇は夫の天武天皇の陵に合葬にされていることから漆棺の主は天武天皇であった蓋然性が高い。墳丘については「形八角石壇一匝―町許歟五重也。」とあり、墳形は八角形の五段築成で、周囲には石壇があったことが記されている。これらの石壇については墳丘を取り巻く列石や貼石の一部と考えられ、その切石が墳丘周辺の畑地から出土している。この石材と同じ規格の石材が高取町の束明神古墳の石室にも使用されていることから両古墳の被葬者との関連性が注目されている。今回、野口王墓古墳に隣接する畑地から出土したとされる個人所蔵の切石を実見する機会を得たので紹介したい。

（西光慎治）



第21図　野口王墓古墳　石材

2、実測調査報告（第21図）

1は長辺15㎝、短辺13.8㎝、厚さ17.5㎝を測る。長辺側は斜め30°に加工されている。2は長辺33.7㎝、短辺22.7㎝、厚さ20.5㎝を測る。長辺側と短辺側の一方は斜め10°に加工が施されている。これらの石材をみると長辺側が斜めに加工されていることから墳丘斜面を覆う貼石であった可能性が考えられる。（西光慎治）

3、石材分析

野口王墓古墳からの転石とされる石材について裸眼で観察を行った。

流紋岩質火山礫凝灰岩：色は白色で、球状をなす黒色の斑点が目立つ。構成礫種は流紋岩・流紋岩質溶結凝灰岩・軽石である。流紋岩は灰色を呈し、粒形が角、粒径が1～8㎜、量がごく僅かで、石基がガラス質である。流紋岩質溶結凝灰岩は黒色～暗褐色で、粒形が亜角～亜円、粒径が2～30㎜、量が多い。基質は縞状や粒状をなす。軽石は白色、繊維状で、粒形が亜角～円、粒径が2～20㎜、量が多い。基質は白色、緻密である。

このような石種は岩相的に大阪府南河内郡太子町山田にある鹿谷寺跡北方付近に分布する流紋岩質凝灰岩の岩相の一部に似ている。（奥田　尚）

【引用・参考文献】

秋里籬島・滕　禹言編1971『大和名所図会』歴史図書社

奈良県立橿原考古学研究所編1999『東明神古墳の研究』

奥田　尚2006「飛鳥地方における飛鳥時代の石材の使用と供給」『酒船石遺跡発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告　第4集　明日香村教育委員会

第3章　総括

今回は都塚古墳と牽牛子塚古墳について墳丘測量調査を実施することができた。二つの古墳は過去にも測量調査や発掘調査が行われており、その成果は当時の状況を知る上で重要な資料となっている。これらの古墳については飛鳥を代表する後・終末期古墳でもあり、年間を通じて多くの観光客が来跡されている。こういった中、古墳を取り巻く環境の悪化が懸念されるようになり、今回現状を把握することを目的とした測量調査を実施した。都塚古墳については墳丘も含め広範囲に測量調査を実施し、また牽牛子塚古墳については所有権の関係上、墳丘部分のみの測量となったが、引き続き周辺部を含めた広範囲の測量調査を実施する予定である。この二つの古墳の測量成果は今後、飛鳥の後・終末期古墳を考える上で重要な資料となり、更には古墳を取り巻く環境や墳丘盛土の形質変化など保存対策を検討する上でたたき台になれば幸いである。（西光慎治）

【追記】

平成21年1月26日、明日香村教育委員会文化財課で長年、遺物の整理作業に携わられてこられた西川貴三子さんがお亡くなりになりました。西川さんには筆者が嘱託時代から遺物の整理作業や展示室の準備作業など公私にわたり大変お世話になりました。西川さんの何事にも積極的に取り組む姿は我々の模範となるものでした。謹んでご冥福をお祈り致します。合掌。

報 告 書 抄 録

ふりがな	おうりょうのちいきしけんきゅう
書　　名	王陵の地域史研究
副 書 名	飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅲ
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 者 名	西光慎治編
著 者 名	西光慎治、辰巳俊輔、奥田　尚
編集機関	明日香村教育委員会事務局文化財課
所 在 地	〒634－0103　奈良県高市郡明日香村大字飛鳥112番地　TEL0744－54－5600　FAX0744－54－5602
発行年月日	西暦2009(平成21)年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
都塚古墳	奈良県高市郡明日香村大字阪田小字都塚	29402-1	17-B-199	34°27′49″	135°49′40″	200812～200901	学術
牽牛子塚古墳	奈良県高市郡明日香村大字越小字塚御前	29402-1	17-A-151	34°27′59″	135°47′32″	200809	学術
真弓テラノマエ古墳	奈良県高市郡明日香村大字真弓小字テラノマエ	29402-1	－	34°27′43″	135°47′30″	199708～200810	学術
野口王墓古墳	奈良県高市郡明日香村大字野口小字尾墓	29402-1	17-A-593	34°28′07″	135°48′28″	－	学術

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
都塚古墳	古墳	古墳時代	方墳、横穴式石室、家形石棺	須恵器	－
牽牛子塚古墳	古墳	飛鳥時代	多角形墳、横口式石槨	－	－
真弓テラノマエ古墳	古墳	飛鳥時代	墳丘背後の切断面	須恵器・結晶片岩	－
野口王墓古墳	古墳	飛鳥時代	多角形墳、横口式石槨	流紋岩質火山礫凝灰岩	－